

# 地域住民による都市公園再生での 課題についての一考察

三 浦 浩 之

(受付 2004 年 10 月 12 日)

## 要 旨

少子高齢化や市民の価値観の多様化などに対応できないために、利用者が極端に減少してしまった公園がある。このような公園は安全性を喪失し、マナーの悪い利用者が集まることなどによって迷惑施設と認識されるような状況にもなっている。このような公園が抱える問題を解決し、かつ、新たな役割を担うっていくための方法として、住民参加による公園の再生がある。住民が参加して公園の再生を行うことによって、公園が抱えている諸問題をどのように解決できるのか、あるいは、解決できないことは何なのかについて、住民に対して実施したアンケート調査結果などをもとに、考察した。

キーワード：公園，再生，住民意識，住民参加，高齢化，ワークショップ，アンケート，AHP 法

## 1. は じ め に

最近、計画・整備された公園は、自然的要素やレクリエーション・休息のための施設、各種の遊具、防災機能などが多様かつバランスよく配置され、景観・安全に配慮されている。さらに、図書館やビオトープなど、人々に学習や環境体験の場を提供する公園も見られるようになっていく。これによって、これらの公園は、比較的多くの利用者を集めている。

その一方、日本において公園は子供のための遊び場所と認識されていること、少子化が進んでいること、テレビゲーム等の普及から子供の遊び形態が変化してきていることから、利用者が著しく少なくなっている公園もある。そのような公園は、ニュータウンの中に作られたものでとくに目立っている。また、これまでの公園整備が、欧米の整備状況に少しでも近づくために、量的な確保に重点を置いてきたために、訪れても楽しさのない公園、特徴が無くどこも同じような公園、防犯性が低い公園など、公園を使う側としての市民から批判され

てもいる。

筆者は前著<sup>1)</sup>で、少子高齢化社会にむけて、このような利用者が減少し、荒廃した雰囲気になっている公園をどう再生してゆけばよいのかを考えた。都市内のオープンスペースが減少してきている中で、公園は子供が遊べる貴重な空間として意識されているが、市民が公園の望むものは「遊び場」としての空間だけではなく、地域の人々がコミュニケーションをとる場、日常生活のストレスを解消する場、生活に豊かな彩りを与える場となることであった。これより、休憩場所の配置やそのデザイン、散歩ルートにおけるストーリー性の付与、公園を前景とする景観デザインなど、様々な要素に配慮して、公園を再生していくことの重要性を指摘した。とくに、現在、公園をあまり利用していない高校生～大学生～若年社会人にも魅力を感じてもらえる公園づくりを考えていくことが必要であることを述べた。

そして、今後の少子高齢化社会に向けて、お年寄りでも小さな子供でも、様々なハンディキャップを持っている人であっても、本当に誰でもいつでも同じように楽しく使え、しあわせ感を体感できるような公園にしていけることが、私たちの *Quality of Life* を実現するには必要であり、そのためには利用者である住民が、公園の再生・リノベーションに参画していくことが不可欠であることを述べた。

そこで、本論文では、このような、住民が参加して公園の再生を行うことによって、公園が抱えている諸問題をどのように解決できるのか、あるいは、解決できないことは何なのかについて、住民に対して実施したアンケート調査結果などをもとに、考察してみる。

## 2. 公園の抱えている課題と要望

公園は様々な課題を抱えており、少子高齢化や市民の価値観の多様化などから公園は新たな役割を担うことが望まれている。これについて、筆者らのこれまでの調査研究結果<sup>1-4)</sup>と広島市が策定した「身近な公園再生構想」<sup>5)</sup>から整理した。

- 
- 1) 三浦浩之：少子高齢化社会にむけたニュータウンの都市公園の再生，人間環境学研究（広島修道大学人間環境学会），Vol. 1, No. 1・2, pp. 81-101, 2003.
  - 2) 青木佳世，三浦浩之，尾崎平，和田安彦：住民参加型の街区公園整備に対する住民意識評価，土木学会第58回年次学術講演会講演概要集，483-484，2003年9月．
  - 3) 青木佳世，三浦浩之，和田安彦，尾崎平：近隣公園の非利用要因に関する研究，土木学会第59回年次学術講演会講演概要集，2004年9月．
  - 4) 青木佳世：住民評価意識をもとにした都市内オープンスペース再生の研究，平成16年3月期関西大学大学院工学研究科修士論文（土木工学専攻環境工学特論専修），2004年3月．
  - 5) 広島市：身近な公園再生構想——地域に愛され育まれる公園に向けて——，2004年3月．

## (1) 公園が抱えている課題

### 1) 子供の遊び場から全ての世代に魅力ある公園へ

市民の多くは、公園＝“子供のための遊び場”と考えており、自分の子供が大きくなると公園を利用することが極端に少なくなる。また、公園の構成自体も子供の遊び場としての視点でしか作られていない。しかし、公園は全ての世代にとっての憩いの場であり、コミュニティの場である。このような固定化された意識を変え、全ての世代にとって魅力ある公園としていく必要がある。

### 2) 変化しているニーズ、多様化しているニーズへの対応

市民が公園に求めることは個々の価値観の変化や社会的条件の変化によって、変わってきている。また、公園周辺に居住する人々の年齢構成も変化してきている。しかし、多くの公園は、整備されて以来、数十年を経ても、とくに施設更新や施設配置の見直しなどは行われていないことが多く、施設も老朽化していて、使いにくい状況になっている。このような公園を、地域の市民のニーズに応じたものへと再生していくことが必要である。

また、最近は公園内での花壇づくりなど、市民が積極的に公園と関わりを持とうとするなど、多様なニーズが生まれている。このような新しいニーズにも対応していく必要がある。

### 3) 画一的でない多様な機能

これまで、公園の設計は主に行政とコンサルタントなどの専門家によって行われてきた。専門的知識と経験による公園づくりは、効率的に公園を整備してゆくには優れた方法であった。しかし、このような標準設計を公園面積や形状によって修正して当てはめていくような公園づくりでは、当然、どこにも画一的で個性のない公園をつくりあげることになってしまう。

価値観の多様化により、市民が公園に求めるものは様々であり、これを小さな一つの公園で対応することは困難である。したがって、公園を利用する市民に視点に立って公園をつくること、地域にある公園がそれぞれ個性を持つことで多様な市民ニーズを全体として応えるように公園をつくるが必要になっている。

### 4) 行政による一律的な公園管理から柔軟な市民管理へ

公園は行政によって管理されているが、このことによって「誰もが利用できるようにするため」という公共性や、事故に対する安全性を重視することにつながっている。これが、結果として、公園での禁止事項（ボール遊び禁止、火の利用禁止など）を多くし、限られた使い方しかでき無くさせている。

市民が公園をより身近なものとして活用していくには、このような利用上の諸規則を少なくし、利用方法を多様化させることである。そのためには、公園の管理を行政から市民に移すこと等により、制限の緩和を図り、同時に、市民の責任を認識させることが必要である。

## 5) 公園利用者マナーの低下

おもに夜間に公園を利用する一部の若年層が、著しい騒音を出したり、施設・器物の破損や落書きしたりするなどマナーの低下が指摘されている。また、若年層に限らず、タバコや空き缶、ごみを散乱させたり、ペットのフンの始末をしなかったりするようなことも見られる。このような公園利用者のマナーの低下は、とくに、公園近隣住民にとっては深刻な問題である。このため、公園を迷惑施設と考え、その立地を好まない人まで出てきている。

このような状況を解消し、市民が公園の立地を歓迎し、気持ち良く利用できる場にしていくことが必要である。

## (2) これからの公園に望まれていること

### 1) 少子高齢化社会への対応

公園＝子供の遊び場ではないが、今後も公園は、子供達にとって屋外で、身体を動かして、様々な体験を安全に行える場としての役割を果たしていくことが期待されている。これは、子供達が創意工夫して遊べるような空き地が減少している都市部ほど、期待が大きい。

また、都市化による住宅形態の変化などによって、昔のように路地裏や各家の庭先、縁側で高齢者が地元の人々と気軽に話しをできるような状況ではなくなってきており、高齢者が自宅に引きこもって地域とのコミュニケーションがとれなくなるような事態も起きやすくなっている。このような高齢者が、公園に出かけることを一つの楽しみ、生きがいとできる状況を生み出していくことが望まれている。

さらに、高齢化社会を迎えて、人々の身体と心の健康に対する関心も高まっており、高齢者が運動や生涯学習・文化創作活動などを積極的に楽しむようになってきている。このような状況に、公園も対応していくことが必要である。公園が高齢者の生きがいづくりの場となることである。

### 2) 地域コミュニティの再生

前節でも述べたが、昔ながらの戸建て住宅や長屋形式の住宅が多く、しかも子供の多かった時代では、地域の人々は、路地裏や生活道路の交差点、家の庭先などで頻繁に交流を行い豊かな地域コミュニティが形成されていた。

しかし、そのような住宅地も高層住宅が林立したり、賃貸住宅が増えたりして変化して、豊かだった地域コミュニティが失われてきた。また、住宅事情などから、郊外ニュータウンに移り住んだ人々もあり、そのような人々が集まった郊外ニュータウンでは、一から新たなコミュニティを形成されてはきたが、以前のような盛んなコミュニティができあがっていないことも多い。さらに、街中では居住する人々が減少してコミュニティが希薄化してしまっている場合もある。

人々がまちで暮らすことの楽しさの一つは、その地域にあるコミュニティに自分も参加できているという意識である。昔のようなコミュニティ空間が失われている現代の都市において、このようなコミュニティへの参加意識を形成していくには、公園がコミュニケーションの場、交流の場としての機能を担うことである。

### 3) 青少年の居場所づくり

今日、少年非行の凶暴化・凶悪化、不登校児童生徒の急増、暴走行為や恐喝・万引きなどの犯罪行為、問題行為を起こす少年の増加等、青少年問題は深刻化している。このような問題の背景には、青少年が夢中になって取り組むこと、それをおこなえる居場所がないことが指摘されている。

公園によって、これらの青少年の問題を全て解決できるわけではないが、現在の公園はこのような青少年が汗を流して遊んだり、何かを友人と語ったり、あるいは一人で思索に耽ったりするような空間とはなっていない。

子供や高齢者だけでなく、青少年にとっても行きたくなるような公園とすることが望まれている。

### 4) 安心できる公園づくり

犯罪の発生件数は急激に増加しており、それに比例して検挙数は低下している。また、その内容も複雑化、凶悪化しており、治安の悪化が人々を不安にしている。このような犯罪の生じる場として公園が無視できない部分を占めているのは事実である。

さらに、最近では、児童や生徒、さらには青年までもが連れ去りや誘拐といった凶悪な犯罪に巻き込まれることも増えており、このような犯罪の発生する場としても公園は大きな部分を占めている。

このため公園は、安全な場所ではなく、危ない場所、犯罪の発生しやすい場所という認識を持たれてもいる。

したがって、今後の公園づくりにおいては、防犯に対する視点も重視し、安全な公園づくりに努める必要がある。

## (3) 市民による公園再生

以上のような公園の抱えている課題を解決し、さらに公園に望まれている事項を果たしていくために、現在、公園を市民の手によって再生していくことが取り組まれている。これは、行政主導による公園づくりと管理に対しての反省、および、行政側の“市民に任せられるところは任せていこう”という行政姿勢の変化によるものである。

公園再生では、市民の参画によって画一化からの脱却を図り、使う側の市民が主体となって自分たちの望む公園に再生していくことが期待されている。また、このような市民が自ら

が地域にある公園を共に考えることから、希薄だった地域コミュニティが形成され、将来的にも公園がコミュニティ形成の場として機能していくことも期待されている。

さらに、市民が公園の有り様を常に考えていくことにより、地域社会の変化により変容していく公園へのニーズに、柔軟に対応できるようになると考えられている。

このように、市民参画によって公園を再生していくことが、多くの公園に関わる問題、課題の解決になると期待されているが、本当にこれは達成されるものなのであろうか。これを、実際に市民の手によって再生された公園の、利用状況や利用者の意識を分析することにより考えてみる。

### 3. 公園再生による利用者増加の要因

開設から30年以上経って施設が老朽化し、利用者が減ってきたことから、公園再整備（再生）が行われた大阪府吹田市の江坂公園を対象に、再生により利用者は何故増えたのかについて分析した。

#### （1）江坂公園の概要

江坂公園は S. 44 に開設、H. 8 に再整備が行われた。公園面積は 2.3 ha で、オフィス街に位置し、周辺に多数のマンションが立地している。

江坂は千里ニュータウンと大阪の北部の中心地である梅田を結ぶ地下鉄御堂筋線～北大阪急行線の接続点であり、千里ニュータウンのまち開きとほぼ同時にこの鉄道路線が営業を開始した。駅開設によって、その近傍にはいくつかのオフィスビルが建設され、この江坂公園もこの時期に整備されたものである。整備当初は樹木が若干ある程度の公園であって、公園周辺にはまだ多数の農地が残っていた。現在では、公園周辺には多数のオフィスビルや商業ビル、マンション、カフェ・レストランなどが建ち並び、ホテルなども立地して、このエリアは大阪北部の副都心的な存在にまで発展している。

現在の江坂公園の風景を写真－1 に、公園位置図を図－1、平面図を図－2 に示す。広場をゆるやかな起伏のある芝生広場とし、大型の複合遊具や休憩場所が設置されている。また、市民の憩いの場を確保した上で、下部に花とみどりの情報センター、図書館、駐車場、駐輪場などの諸施設が整備された。さらに、園内には鉢植えの花が並んだ建物「いざないのインナーガーデン」という屋上庭園の見本園があり、日本でも親しまれているハーブや欧米の針葉樹類などが集められている。

今後の都市公園のあり方、手法を見事に立証したモデルケースとして高く評価されており、大阪府の第8回みどりの景観賞（平成9年度）の最優秀賞を受賞している。





写真－ 1(1) 江坂公園風景（いこいの森）



写真－ 1(2) 江坂公園風景（ちびっこ広場）



写真－ 1(3) 江坂公園風景（ハーブ園）



写真－ 1(4) 江坂公園風景（つどいの広場）



写真－ 1(5) 江坂公園風景（図書館）



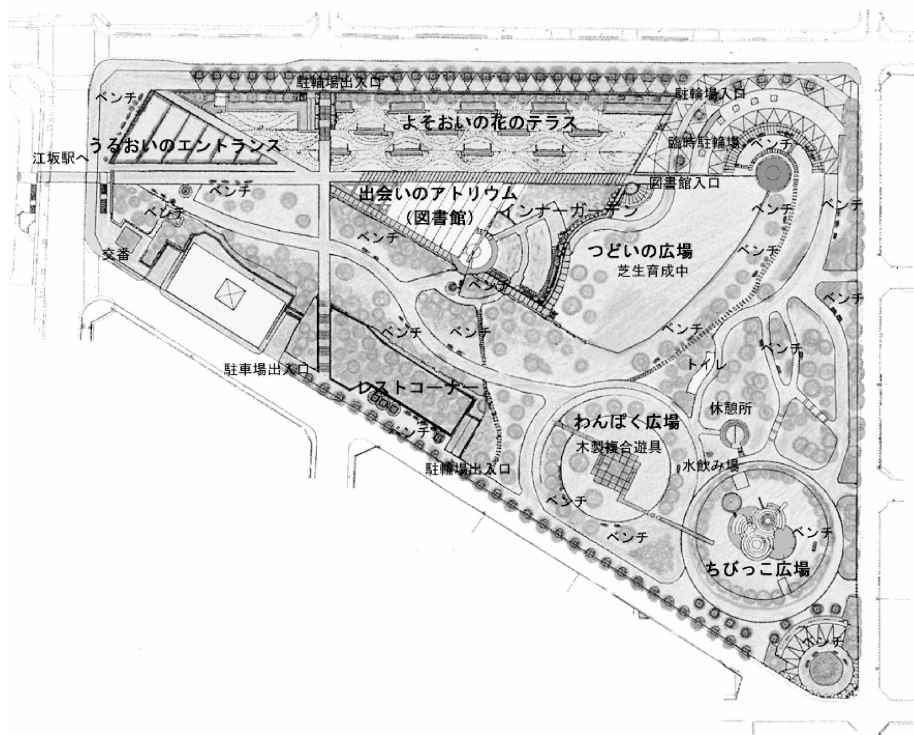
写真－ 1(6) 江坂公園風景（日時計の休憩所）

## (2) 再整備による効果

平成14年8月から11月にかけて計6回、公園利用者に対して直接面談方式でアンケート調査を行った。アンケート回答数は367、有効回答率は95%である。アンケート内容は再整備前後の利用頻度、利用目的、利用理由、イメージ評価、施設評価等である。



図一 1 江坂公園位置図



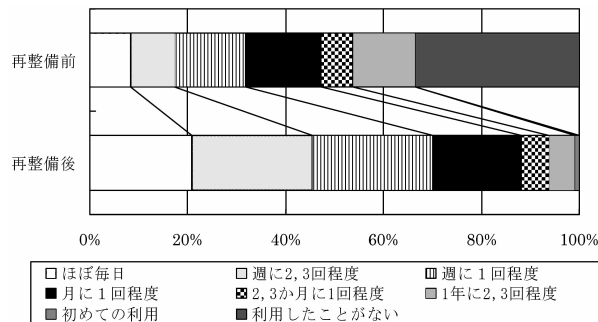
図一 2 江坂公園平面図



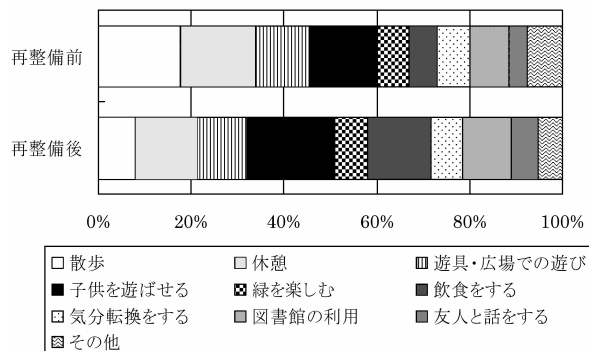
地域住民による都市公園再生での課題についての一考察

まず、再整備によって、利用頻度と目的にどのような変化が生じたのかをたずねた結果を図－3～5に示す。

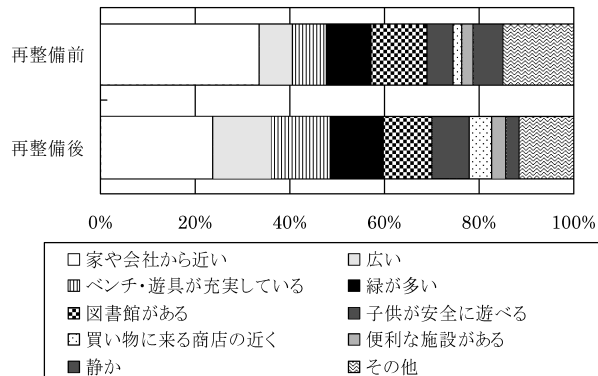
再整備によって、利用頻度は大きく増加しており、週に1～3回程度利用している人が多く、21%の人はほぼ毎日利用している。また、現在、利用している人の34%は、以前にはこ



図－3 再整備前後の公園利用頻度の比較＜江坂公園＞



図－4 再整備前後の公園利用目的の比較＜江坂公園＞



図－5 再整備前後の公園利用理由の比較＜江坂公園＞

の公園を利用したことがない人であり、再整備によって公園が魅力的になり、新たな来園者を得ていることがわかる。

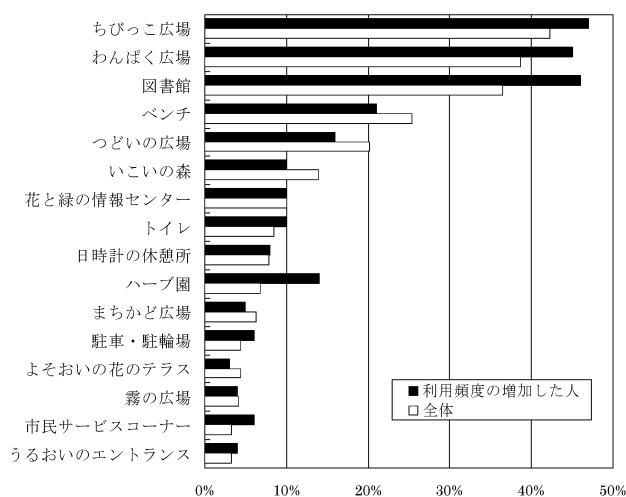
利用目的をみると、再整備前では「散歩」、「休憩」といった比較的非活動的な利用が主であったのが、再整備によって「子供を遊ばせる」、「飲食をする」、「図書館の利用」といった活動的な利用が増えている。再整備前は、木ばかりの公園で遊具も少なく、うっそうとした感じの公園だったが、再整備により小さな子が遊べるような遊具ができて明るくもなったため、子供が遊び易くなって、この様な利用が増えている。また、休憩できる施設が増えたため、周辺の会社員などが昼食をする際に利用することも多いようである。

この江坂公園を利用している理由では、基本的に、家や会社から近いことがあげている人が多いが、そのように回答した人の割合は、再整備前が35%であったのが、再整備によって23%にまで減少している。その代わりに、「広いから」、「ベンチ・遊具が充実している」、「緑が多いから」など公園自体の魅力を理由にあげている人の割合が増えている。再整備によって、この様な魅力を持った公園に変わったため、単に近いから利用するのではなく、行きたくなるような魅力があるから来園していることがわかる。

### (3) 利用頻度を増加させたもの

再整備によって江坂公園は来園者の利用頻度が大きく増している。そこで、どのような施設をよく利用するかということによって、利用頻度の増加が何に起因するものであるのかを検討した。

よく利用する施設を、再整備後に利用頻度が増えた人と、回答者全体とで比較した（図－6）。



図－6 よく利用する施設＜江坂公園＞

利用頻度の増加した人では回答者全体と比較して，“図書館”，“ハーブ園”，“わんぱく広場”，“ちびっこ広場”をよく利用する施設としてより多くの割合であげている。

図書館は再整備前から当公園にあったが、再整備により図書の充実や読書空間の快適化が図られ、かつ、最新の映像機器も設備しているため、利用増加を導いている。また、ハーブ園は新しく設けられたもので、最近の、アロマテラピーや癒しの流行によって、これを目当てに訪れるようになった人が多数いることが考えられる。これらのような、公園において、身体を動かすだけではなく、精神的な満足や癒しを与えてくれるような、静的な趣味に役立ててくれる施設のあることは、人々の来園を増してくれることになる。

ちびっこ広場はドーム状の遊具で、周囲にはベンチが配置されており、比較的小さな子供であっても目を届かせて遊ばせることができるため、人気がある。また、わんぱく広場にはこの地域では見かけない大きな木製遊具があるため、これも子供達に人気の施設である。このように、遊び場としての魅力が増えていることも利用頻度を増加させている。すなわち、様々な遊具が複合しているため、子供達の創意工夫で色々な遊びができ、このため何度でも訪れて遊びたくなる公園になっているのである。

#### 4. 公園再生に参加した住民の意識

前章で、公園の再生を行うことにより、来園者を大きく増加させることのできることに、それには市民のニーズを反映させた公園づくり、新しい利用形態を掘り起こせる公園づくりが有効であることを明らかにした。

都市開発が進み、休息を求めてちょっと立ち寄るオープンスペースが減少している中で、緑と水の安らぎや癒しが得られ、散歩や運動の適う場所は唯一公園があるのみという状況になっている<sup>6)</sup>。公園利用は、一般的に休息、観賞、散歩、遊戯、運動などのレクリエーション活動の場としての他、文化活動、スポーツ活動、地域のコミュニティ活動の場としての機能を果たす、多様な側面をもっている<sup>7)</sup>。公園は住民ニーズの多様化に対応することが求められており、利用されていない公園を再整備することが必要になっている<sup>8)</sup>。また、身近な地域施設が地域住民に愛着を持って管理運営されるには施設の物理的な魅力づくりだけでは不十分であることから、公園に対し、愛着を持って自分たちの空間と思えるように住民が話し合いによって合意形成したり、ワークショップ方式を取り入れたりする住民参加による公園再整備が各地で行われている。

6) 伊藤章雄：今公園で何が起きているか—変わりゆく公園と地域における新しい役割—, pp. 2-20, ぎょうせい, 2002.

7) 金子忠一：公園の多様化と公園運営の多面性, ランドスケープ研究 63(2), pp. 91-93, 1999.

8) 平山実：住民参加プロセスと制度, ランドスケープ研究 60(3), pp. 215-217, 1997.

そこで、次に、公園再生ワークショップに参加した住民の公園に対する意識を明らかにすることで、公園再生に参画することによって、住民（市民）は公園を望むものとしてできているのか、また、コミュニティの場として活用できているのかについて考察した。

考察するポイントは次のものである。

課題の解決	子供の遊び場から全ての世代に魅力ある公園へ
	変化しているニーズ、多様化しているニーズへの対応
	画一的でない多様な機能
	行政による一律的な公園管理から柔軟な市民管理へ
	公園利用者マナーの低下
望まれていること	少子高齢化社会への対応
	地域コミュニティの再生
	青少年の居場所づくり
	安心できる公園づくり

### (1) 対象公園

対象公園として、住民参加により公園の再整備案をまとめ、再整備により利用者の増加している兵庫県尼崎市東武庫夢公園と、比較対象として東武庫夢公園のから 250 m 離れた場所に位置し東武庫夢公園の利用者も利用したり目にしたりする機会のある生津公園を選定した。両公園の位置関係を図－7 に示す。



図－7 東武庫夢公園周辺地図

東武庫夢公園は面積 0.14 ha で、昭和39年に開設され、平成12年に住民参加により再整備された。公園の計画段階から住民が参加して、ワークショップ（以下、WS）を開催しながら公園の再整備案を地域住民と行政が協働してまとめていったのは、尼崎市では初めての試みであった。公園誘致圏（半径250m）とほぼ合致する武庫元町 1 丁目内約800戸へのビラ配布と町内会回覧版により参加を呼び掛け、住民の自由参加という形式で 4 回の WS（表－1）を開催し、公園の計画案がまとめられた。遊具等を定める詳細検討会や工事の現場見学会、花づくりグループや公園の維持管理についての WS も開かれた。その結果、花壇の手入れや公園の清掃などの「整備後の公園の育成」といったことも話題に上り、地域住民による公園育成会も結成されている<sup>9,10)</sup>。

表－1 東武庫夢公園でのワークショップ

回	日 程	参加人数	テ ー マ	内 容
第 1 回	H.11.09.25	48	公園に期待するもの (機能)	・ 現況での特性と問題点 ・ 公園での思い出 ・ 公園でこんなことしたい
第 2 回	H.11.10.23	42	こんな公園がほしい (空間)	・ 公園のイメージ ・ 公園施設への希望 ・ 空間構成のバリエーション ・ 模型で表現してみよう
第 3 回	H.11.12.11	40	デザインを考えよう (計画)	・ 計画素案の説明 ・ 意見交換 ・ 課題点の確認
第 4 回	H.12.01.30	24	公園を育てる (管理)	・ 計画案の説明 ・ 公園に愛称をつけよう ・ 公園の育て方

尼崎市土木局河川緑地部公園課 みんなでつくろうみんなの公園  
 ・ 東武庫夢公園ができるまで——住民と行政の協働による公園再生の記録——  
 ・ 南武庫公園ワークショップのご案内

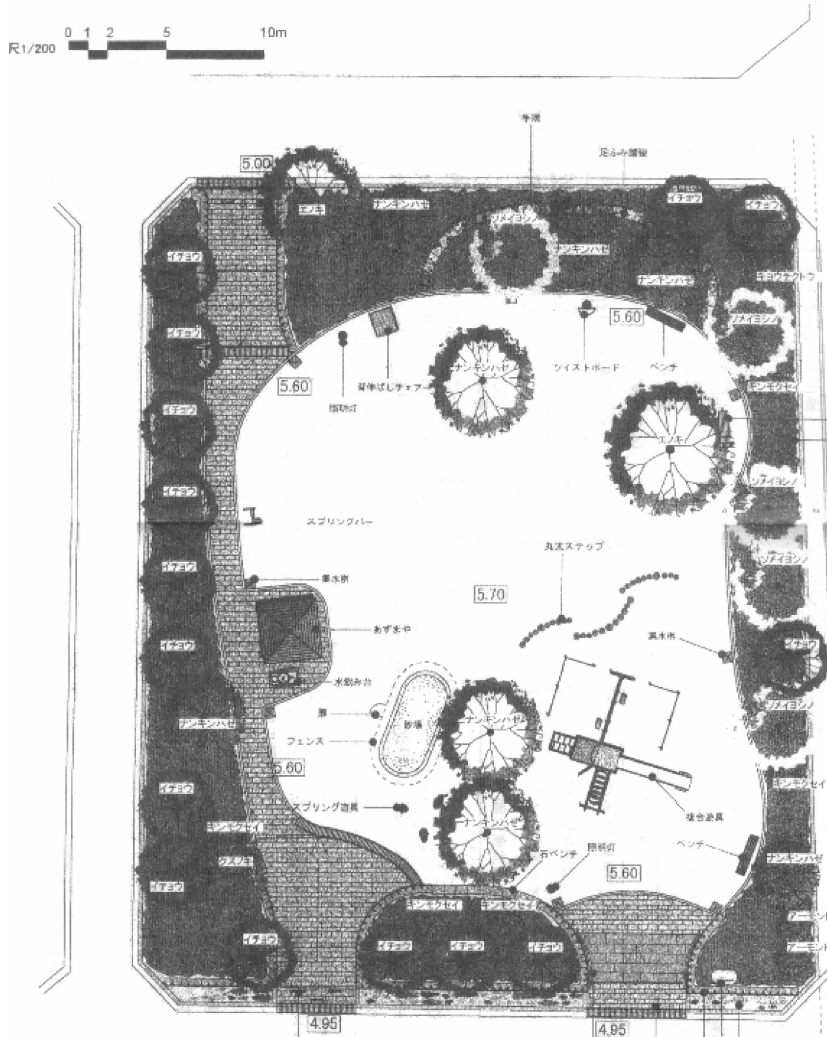
一方の生津公園は、面積は東武庫夢公園の約 2 倍の 0.30 ha あり、住宅地の中に位置し、小さな子供や小学生の利用が多い公園である。平成 3 年に再整備が実施されたが、これは行政によるもので住民の参加による再整備内容の検討などは行われていない。

東武庫夢公園の再整備後の平面図を図－8 に示す。また、東武庫夢公園・生津公園の写真をそれぞれ写真－2, 3 に示す。東武庫夢公園は一目で公園が見渡せるほどの広さで、施設は

9) 尼崎市土木局河川緑地部公園課：みんなでつくろうみんなの公園 東武庫夢公園ができるまで——住民と行政の協働による公園再生の記録——，2001.3.

10) 尼崎市土木局河川緑地部公園課：みんなでつくろうみんなの公園 南武庫公園ワークショップのご案内，2001.





図一 8 東武庫夢公園平面図

遊具や砂場、健康器具、東屋等だけで、小さな子供とお年寄りを主な利用対象として想定している。住民によって管理活動がされているため、公園には季節の花が咲き、ゴミも落ちておらず、非常にきれいで明るい公園である。

## (2) 住民参加の有無による再生公園に対する評価の違い

住民が参加することによって、同じような公園の再生であっても、再整備された公園の有り様は異なっていく、住民の公園に対する評価も異なっていると考えられる。

そこで、両公園について住民がどのように評価しているのかを、アンケート調査結果の分

地域住民による都市公園再生での課題についての一考察



写真－ 2(1) 東武庫夢公園風景 (1)



写真－ 3(1) 生津公園風景 (1)



写真－ 2(2) 東武庫夢公園風景 (2)



写真－ 3(2) 生津公園風景 (2)



写真－ 2(3) 東武庫夢公園 (3)



写真－ 3(3) 生津公園風景 (3)

析により考察した。

アンケート調査は平成14年11月から12月にかけて計4回、東武庫夢公園のWS参加呼びかけ地域を中心とした公園周辺地域と生津公園周辺地域において、訪問調査方式で行った。アンケート回答数は175である。質問内容は東武庫夢公園、生津公園の利用頻度、利用目的、

利用理由、また公園構成要素の比較、東武庫夢公園のワークショップについて、公園整備への住民参加についてである。

ここでは、それぞれの公園を利用する理由を、公園の構成要素（設備）から考察してみた。

ひとの意思決定にはまず「問題」があり、そして最終的な選択の対象となるいくつかの「代替案」がある。代替案の中から1つに絞り込むために、ある「評価基準」が存在する<sup>11)</sup>。今回のケースでは「問題」は“公園の選定”であり、「代替案」が“東武庫夢公園”，“生津公園”である。そして「評価基準」となっているものを、公園を構成する要素と考え、“遊具の数”，“遊具の種類”，“ベンチの数”，“草花の多さ”，“樹木の多さ”，“見通しの良さ”をとりあげた。

この公園選定における意思決定プロセスを AHP（Analytic Hierarchy Process：階層分析法）法によって解析した。AHP 法とは問題の分析において、主観的判断とシステムアプローチをうまくミックスした問題解決型意思決定手法の1つである<sup>12)</sup>。意思決定の階層図を図9に示す。

まず、一般的に公園を構成する要素の中でどの公園要素を重要と考えているのか AHP 法によって一対比較した（表2）。その結果を図10に示す。公園要素として「見通しの良さ」が特に重要視されている（重要度 0.321）。実際、両公園において訪れているのが一番多いのは、子供を遊ばせている母親であり、子供の安全を確保するためには、常に子どもを見ていられることが重要であり、これを可能にするには公園内の見通しが良いということが必

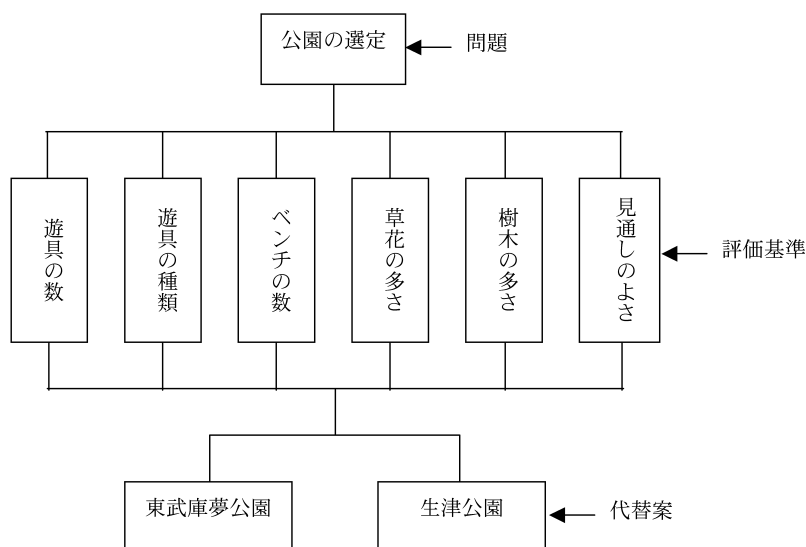


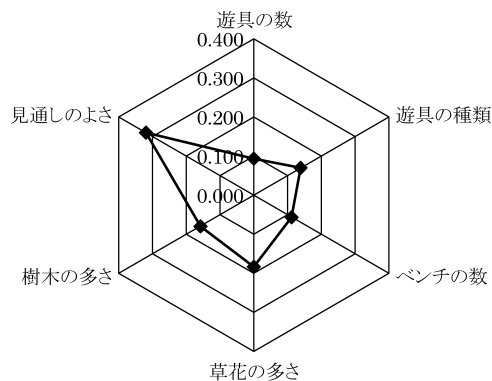
図9 AHP 法階層図

11) 刀根薫：ゲーム感覚意思決定法——AHP 入門——，日科技連出版社，pp. 8, 1986.

12) 木下栄蔵：入門 AHP 決断と合意形成のテクニック，日科技連出版社，pp. 2-3, 2000.

表－2 公園の構成要素の重要度

	遊具の数	遊具の種類	ベンチの数	草花の多さ	樹木の多さ	見通しよさ	重要度
遊 具 の 数	1.000	0.521	0.851	0.533	0.589	0.384	0.094
遊 具 の 種 類	1.920	1.000	1.060	0.717	0.754	0.436	0.135
ベンチの数	1.174	0.943	1.000	0.561	0.597	0.383	0.111
草花の多さ	1.876	1.395	1.782	1.000	1.339	0.462	0.183
樹木の多さ	1.697	1.343	1.676	0.747	1.000	0.401	0.157
見通しのよさ	2.607	2.293	2.610	2.164	2.495	1.000	0.321



図－10 公園構成要素の重要度

要になる。このため「見通し」が最も重要度が高くなったと考えられる。これに次ぐのが草花の多さ（同 0.183）、樹木の多さ（同 0.157）であり、都市化されて自然空間がほとんど無いような都市部の住宅地においては、公園は自然的環境を提供することが大きな役割として望まれていることがわかる。以外にも、「遊具の種類」、「ベンチの数」、「遊具の数」についてはそれほど重視されていないことがわかる。

次に、公園要素として設定した項目に関してそれぞれどちらの公園の方がよいと思うのかについて比較を行った。結果を図－11に示す。東武庫夢公園の方が大半の要素でよい評価となっている（「ベンチの数」の評価のみ生津公園の方が高い）。写真に示したように、東武庫夢公園の方が、面積は狭いものの、見通しを確保するように生け垣は設けず、住民の手による美しく花の咲いた花壇が入り口周囲に設けてあり、全般に明るい印象を受ける。また、樹木数そのものは生津公園の方が多いものの、開放的な雰囲気、適切に樹木が配置してあるため、印象として緑の多い公園と意識されていると考えられる。

公園の構成要素の重要度と、それぞれに対する各公園での評価結果から、総合的にその公園の“良さ”を把握するため、次の計算式<sup>11)</sup>により、公園の“総合得点”を算出した。

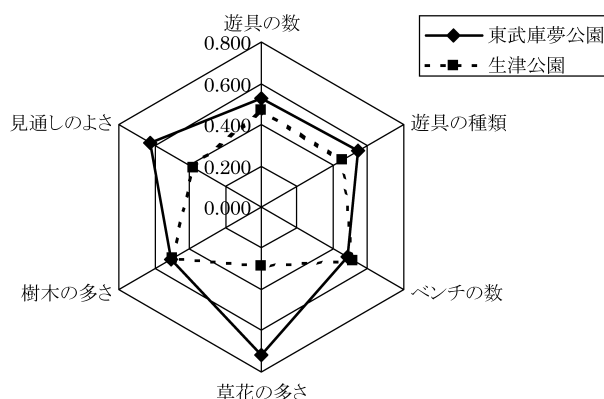


図-11 対象公園での構成要素の重要度

$$T = \sum_{k=1}^6 w_k \times t_k$$

ここで  $T$ : 総合得点,  $w_k$ : 公園要素の重要度,  $t_k$ : 要素別の相対評価値

$k$ : 公園要素 (1: 遊具の数~6: 見通しのよさ)

総合得点は東武庫夢公園 0.586, 生津公園 0.414 と東武庫夢公園の方が高得点であった。東武庫夢公園と生津公園では利用目的・理由に大きな違いは見られないが、住民が重要と考える公園要素が東武庫夢公園の方で充実していることが、東武庫夢公園の評価を高くしている。とくに東武庫夢公園ではワークショップ後に地域住民による公園育成会が結成されており、地域住民により花壇の手入れが行われていることが、公園選択で重視されている「草花の多さ」でよい評価となり、高得点につながっている。さらに、公園選択で最も重視される安全性確保のための「見通しの良さ」は、東武庫夢公園では WS によって住民側が強く要望したため、これが反映された公園の構成となっており、このことが良い評価に結びついている。

住民参加によって、住民の公園に対するニーズや要望が実現されるようになり、このことがその公園に対する評価を高め、利用を促すようになっていることが明確に示されていると判断できる。

### (3) WS 参加による住民の公園利用状況と意識の変化

公園再生に参加することにより、公園の利用状況が変化するのか、また再整備に参加することにより、参加後の公園・地域に対する意識は変わったのかを検討した。

東武庫夢公園の WS 参加者の呼びかけを行った武庫元町 1 丁目において、公園再整備にあたって WS が開催されていたことを知っていた人は75%にも達しており、WS が実施されて



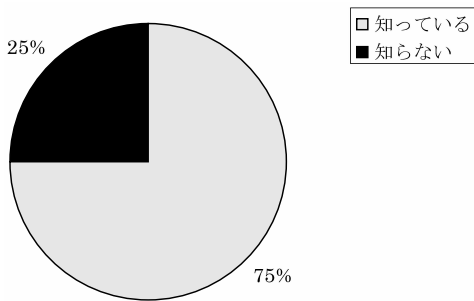


図-12 WSのことを知っているかどうか

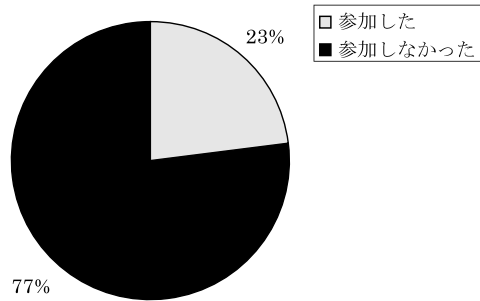


図-13 WSに参加したかどうか

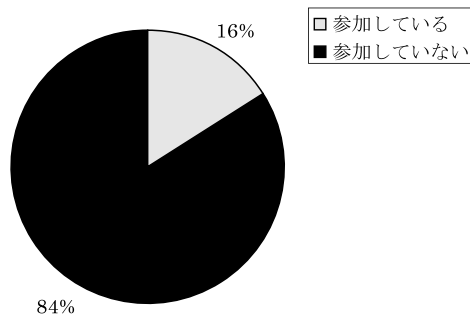


図-14 管理活動に参加しているかどうか

いることは比較的多くの人々が認識していた（図-12）。その中でも実際にワークショップに参加した人は23%（図-13）、管理活動へ参加している人は16%しかいなかった（図-14）。

尼崎市における初めての試みであったことから、行政側は呼びかけを徹底して行っており、それにより WS の認知度は高かった。認知されている割には実際に参加した人が少ないように思えるが、これは WS への参加者があまりに多いと WS の運営に支障を来すことが多く、通常は参加者数を30名程度に抑えるためであり、WS 実施を知っていた回答者の23%が参加しているということは、決して低い参加率とはいえない。

次に、WS に参加した人と参加していない人それぞれの東武庫夢公園の利用頻度を比較して図-15に示す。WS 参加者は「ほぼ毎日」が12%、「週に2, 3回程度」が40%、「週に1回程度」が24%と週に1回以上利用している人が76%も占めており、非常に利用頻度が高い。一方、参加しなかった人は「月に1回程度」が24%、「1年に2, 3回程度」が20%となっている。週に1回以上利用している人は28%と、参加者と比較すると利用頻度が非常に低い。WS へ参加するという人はもともと公園に対する思いが強くあり、よく利用もしていたと考えられるが、WS への参加がさらに公園の利用を促していることは容易に予想できる。

これは、WS へ参加した人と参加していない人の、当公園の利用理由を比べてみるとよく

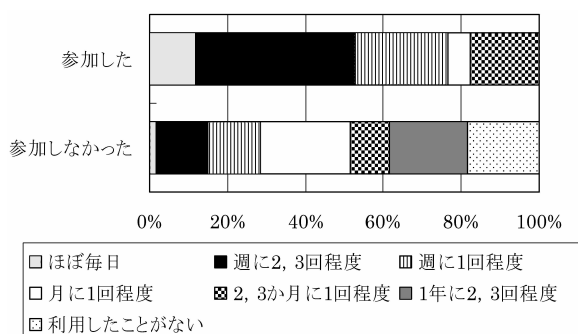


図-15 WS 参加の有無による東武庫夢公園の利用頻度

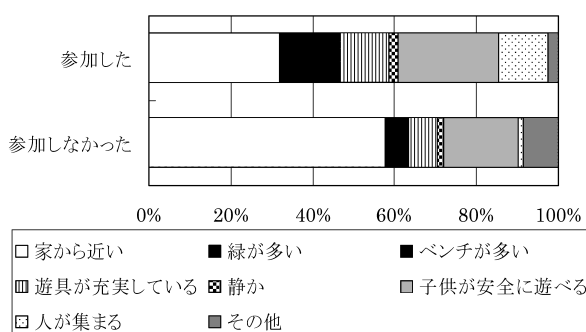


図-16 WS 参加の有無による東武庫夢公園の利用理由

わかる（図-16）。公園まで「家が近いから」を利用理由に挙げている人がどちらのグループでも多いが、WS 不参加者ではその割合が59%と非常に高いのに対して、WS 参加者はこれを理由に挙げている人の割合が33%と約1/2に少なくなっている。その代わりに、WS 参加者では、「子供が安全に遊べるから」を24%の人が、「緑が多いから」を15%の人が挙げており、これらを利用理由としている人の割合は、いずれも WS 不参加者での回答割合を大きく上回っている。WS に参加することで、公園が再整備されてどのようなものになるのかを十分把握し、その上で、利用している状況が伺える。

#### (4) WS 参加による愛着やコミュニケーションの場の形成

WS という参加形態によって公園再整備の計画を住民自らが考えることで、住民の持つニーズへの対応、画一的でない多様な機能の提供、安心できる公園づくりという点で良い結果が得られていることがわかった。

これらの他にも、公園が抱えている課題や、今後の公園に望まれていることはある。その中で、地域コミュニティの再生について考えてみる。

まず、公園が地域コミュニティの場として機能するには、その公園が人々に愛着を持たれ

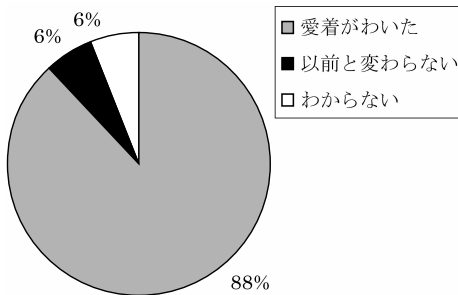


図-17 WSに参加して公園に愛着がわいたかどうか

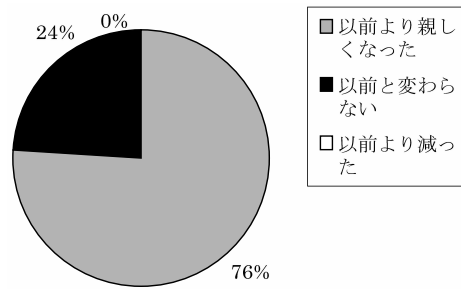


図-18 WSに参加した前後の近所づきあいの変化

ていることが必要である。まず、「あなたが思い描いていた公園になりましたか？」という質問に対しては、WS参加者全員が“なった”と回答しており、この公園が住民の思いに応えた公園であることがわかる。次に、「WSに参加して公園に愛着がわきましたか？」という質問に対しては、図-17に示すように、「公園に愛着がわいた」という人が88%と大部分を占めている。このように、この公園はWS参加者の様々なニーズに応えるものとなって、愛着のわく公園となり得ている。

そして、「WSへの参加により地域の人との付き合いはどうなりましたか？」という質問に対しては、76%の参加者が“以前より親しくなった”と回答しており（図-18）、WSに参加することで、これまであまり付き合いのなかった人たちと公園を共通の話題として、コミュニケーションをとるようになり、結果的にこれがその後の付き合いも密なものとしていることがわかる。したがって、公園再生への住民参加は、公園を再生するだけでなく、都市部などで希薄化してきている地域コミュニティをも再生できるものであることが実証されたのである。

## 5. 公園再生への住民参加の促進に向けて

公園再生に住民が参加して、様々な人々が、公園に対する思いや希望、要望を話し合い、それらを満足させ得るような公園として再整備すれば、様々な公園の抱える課題を解決できることが明らかになった。

しかし、実際に、現在行われているようなWS形式での住民参加が万能であるのではなく、これによって住民の持つ意見の大半を吸い上げて、具体的な形とできているわけでもない。

ここでは、これまでのWSという住民参加に参加してこなかった人々の意識について考察することで、今後の住民参加の促進に向けて取り組むべきことを考えてみる。

### (1) WS への参加しない理由

東武庫夢公園での WS への参加理由、不参加理由を図-19に示す。

WS に参加した理由は、「公園に興味があったから」が最も多く、36%を占めている。続いて「住んでいるまちのことだから」27%、「WS に興味があったから」16%となっている。一方、WS に参加しなかった理由は、「WS のことを知らなかった」が58%と半数以上を占め、続いて「忙しかったから」が28%となっている。

これらより考察すると、WS への参加の案内は地区の自治会などを通じて各家庭に対して行われているが、このような案内情報を見るのは通常、主婦であり、その他の人は普段あまり眼にしない。また、このような案内情報にあまり関心を持っていない人もいる。

WS への参加を促すには、これまでのような情報提供方法を踏襲するのではなく、別の情報提供方法、例えば、最寄りの公共交通機関の駅やバス停に情報を提示する、公共交通の車輦内で情報提示する、主婦層以外の利用の多いコンビニエンスストアやドラッグストア、キオスクなどの街頭型店舗などでも情報提供するといった、新しい手法を検討すべきである。

また、WS の開催も、行政側の都合で平日の昼間に行うということではなく、就労者も参加しやすい週末や平日の夜に行うなどの工夫も必要であろう。そうでないと、WS の参加者

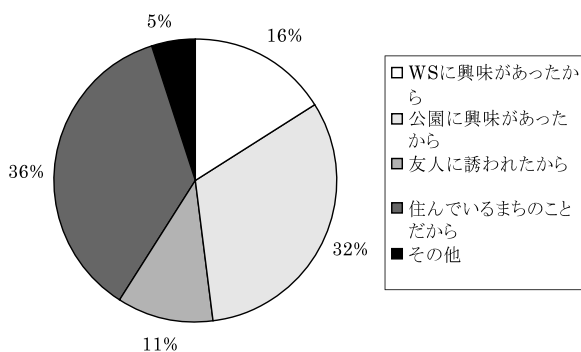


図-19(1) WS に参加した理由

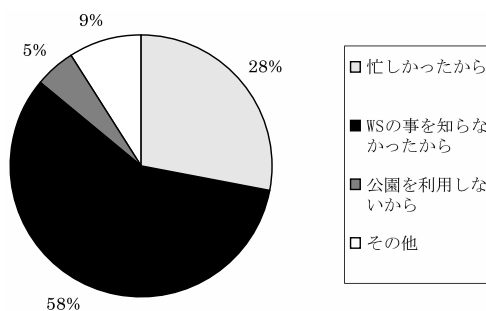


図-19(2) WS に参加しなかった理由

が子供が学校に行っていたり、独り立ちしたりしている主婦層と、定年退職した夫婦に限られてしまう状況になる。

現在、実施されている WS の中には、事業に住民を参加させたという実績を残すために行っているようなものもある。本当に住民の参加を促して、よりよい事業としていくには、さらに多くの人々の参加を促すように工夫を続けていく必要がある。

## (2) 公園の管理活動に参加しない理由

公園の再生を図り、公園の抱えている課題を解決することの一つ、公園を行政による一律的な管理から柔軟な市民管理へと変えていくことが挙げられている。この点についても検討した。東武庫夢公園での管理活動への参加理由、不参加理由を図-20に示す。

管理活動に参加する理由は、WS 参加者の49%が「公園に責任があるから」を選択している。「公園に愛着があるから」とあわせると62%人が WS の影響で管理活動に参加している。WS に参加しなかった人が管理活動に参加する理由としては「コミュニケーションが取れるから」が38%だった。また、その他が62%だったが、この中の多くが、「子供会で清掃活動を

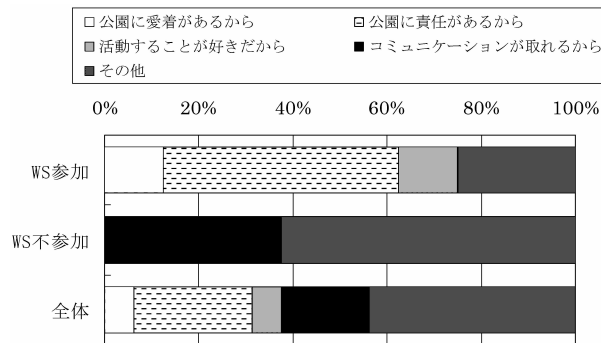


図-20(1) 管理活動に参加している理由

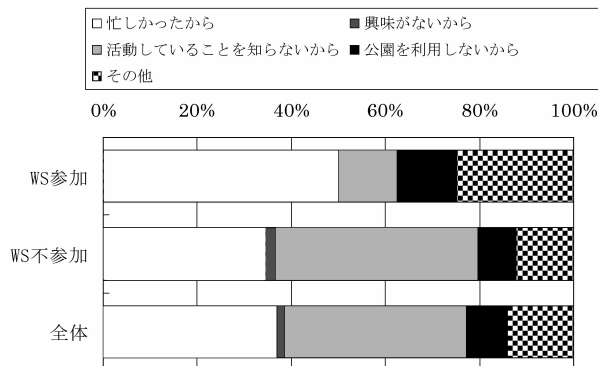


図-20(2) 管理活動に参加していない理由



している」ということだった。

一方、管理活動に参加しない理由は、WSに参加した人の49%が「忙しいから」を挙げている。WSと違い、管理活動は継続するものなので、仕事との兼ね合いや子供の状況などによって参加が難しくなることがあるようである。管理活動に参加していない人はWSと同様に「活動していることを知らないから」が理由である人が43%と半数近くを占めている。また、「忙しいから」を理由としている人も35%と多い。管理活動に不参加であるからといって、管理活動に参加したくないのではなく、したいと思っても何らかの状況により参加ができない様になっていることが伺える。

管理活動により多くの住民の参加を進めるには、この活動によって得ることのできる地域コミュニケーションや、公園への愛着・責任といった公園の“身近さ”，“地域住民のものである”といった事柄をうまく伝えていって参加意欲を高め、その上で、毎週日曜日の朝に実施するというように管理活動を画一的にするのではなく、それぞれが自由な時間にできる範囲で管理を行えるような状況づくりにも取り組む必要がある。

### (3) 今後のWSへの参加意欲

今後、公園再整備では住民参加を取り入れた方が良いかどうかを尋ねている。その結果を図-21に示す。WSに参加した人は88%が「取り入れた方が良い」としており、「取り入れなくて良い」を選択している人はなかった。参加しなかった人でも80%「取り入れた方が良い」を選択している。

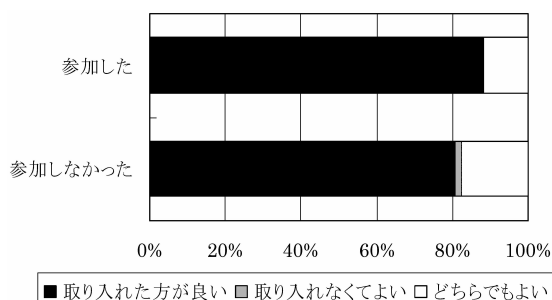


図-21 WS参加の有無による公園整備への住民参加を取り入れた方が良いか

また、今後の公園整備への参加について尋ねたところ、参加した人は92%が今後も参加したいと答えている（図-22）。これはWSが成功した結果だと言える。参加しなかった人でも56%が今後参加したいと回答している。参加しなかった人の多くがWSの事を知らなかったことから考えると、今回参加しなかった人でも今後はWSに参加したいと考えている人が

地域住民による都市公園再生での課題についての一考察

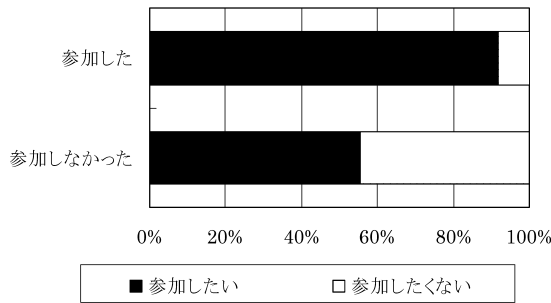


図-22 WS 参加の有無による今後の公園整備計画に参加したいかどうか

多いことがわかる。

東武庫夢公園ワークショップでは、ワークショップの呼びかけを800戸に行ったにもかかわらず参加者は毎回40人程度であった。アンケートの結果から「ワークショップの事を知らなかった」と答えた人が多かったことからわかるように、ワークショップの呼びかけ方法に問題がある。また、仕事や子育て等で時間が取れない人も多いのでワークショップに参加できない人に対しては、別の方法の検討が必要である。

人々の公園再整備に対する参加意欲は高い。したがって、WS という方式に限定するのではなく、より多くの人々の参加意欲に応えられるような参加方式を今後は検討していく必要がある。例えば、地域のコミュニティテレビでの情報提供と e-mail などを用いた意見募集を合わせる方式や、マンションのモデルルームのように、パネルや電子情報システムを展示して事業に関する情報提供を行い、同時にそこで意見を把握する手法である“オープンハウス”方式を用いるなどである。

その他にも次のような方法も考えられる。

- ・ 時間的余裕がない人々の意見を反映させるために、自治会などでアンケートを実施して、意見の収集を図る。例えば、遊具の選定、ベンチの設置数や設置の位置、公園に植える花や木の種類の選定、花や木の植栽に関するアンケートを行う。
- ・ WS に参加していない人にも回覧板などによって、様々な活動の状況を広く公開する。さらに、管理状況についても、あまりタイムラグを作ることなく情報提供し、参加の呼びかけもすることで、より管理活動へ参加しやすい状況を作る。
- ・ 行政と地域住民が協働して、公園の HP を作って様々な関連情報を公開するとともに、住民が公園についての苦情・感想など何でも書き込めるようにする。

これらによって、地域に住む人々のニーズをより反映させていくこと、地域への人々の帰属意識を高揚させて地域に愛着と関心を持たせていくことなどが行えるものと考えられる。

## 6. お わ り に

利用者の減少による荒廃や安全性の喪失、マナーの悪い利用者による迷惑施設としてのイメージの形成など、現在、公園は様々な問題を抱えている。これら問題を解決し、さらに、少子高齢化社会における地域の活力確保や地域コミュニティの希薄化への対応といった地域が直面している様々な問題に対して、身近な存在である公園の再整備に住民が参加することが、どのような役割を果たしているのかを検討した。

3つの公園での再生事例とその周辺住民の利用状況、利用意識の調査によって、公園再生への住民参加は、次に示す問題や課題を解決できる可能性を持つことが明らかになった。

### 《公園の抱えている課題》

- 変化しているニーズ、多様化しているニーズへの対応
- 画一的でない多様な機能
- 行政による一律的な公園管理から柔軟な市民管理へ

### 《公園に望まれていること》

- 地域コミュニティの再生
- 安心できる公園づくり

また、今回の論文ではあらためて提示はしなかったものの、筆者のこれまでの研究と合わせて考えると、公園再生への住民参加によって、従来、子供のための遊び場というイメージでしかなかった身近な公園が、高齢者も訪れたいくなるようなものへと変わってゆけるといえる。

しかし、

- 子供の遊び場から全ての世代に魅力ある公園へ
- 青少年の居場所づくり

という面では、これまでの公園再生への住民参加では、解決策とはなり得ていない。これは、ひとつにこれまでのWSなどへの参加者が、主婦層と高齢者に偏っていたことがある。さらに、若者が公園を利用する＝騒いで迷惑、といった意識があり、若者が公園を今まで以上に利用することに対しての抵抗感があったことによると考える。加えて、路上生活者などが公園を住处として利用している実態もあり、子供と高齢者以外が公園を活発に利用するということをあまり好んでいないように思える。これらの要因によって、いわゆる若者から現役の大人世代（就労している世代、子供が少し大きくなって手を離れた世代など）が公園を利用するのに配慮するという視点が欠落している状況になっている。

これからは、このような世代にとって公園がどのような役割を果たせるのか、また、どの

ような公園であることを望んでいるのかを把握して、本当の意味で地域のコアとなりコミュニケーション空間となるような公園としていくことが必要と考える。

なお、本研究では、アンケート調査において、当時の関西大学工学部都市環境工学科環境システム研究室の大学院生青木佳世氏（現、玉野総合コンサルタント株式会社設計第2部公園緑地課）と卒研生の協力を得た、ここに記して謝意を表します。